

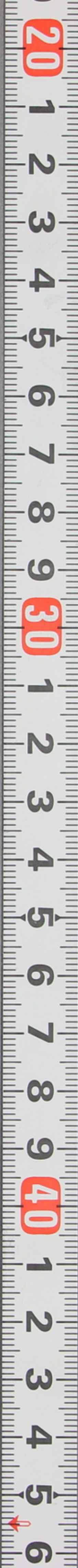


繪本漢楚軍談

二編

六

13
3565
16



門 へ 13
號 3565
卷 16

訂正
繪本漢楚軍談第二輯卷之六

東都 鷓鴣貞高纂述

第四十三回 韓信出師暗度陳倉

兵法曰攻其無備出其不意と云。合戦之道ふかぬ。蓋奥秘術と
謂はれ。其故如何ゆと索探るふ敵を攻るは豫め己の兵法調練
よく計畧を密に。幟指物物具より。楯矛等亦至るまで。閑
之と調へ。然る討出る時て。機を善き攻入る。されば敵
防戦の備を堅くするれば。敵陣強き其時へ之と避く時と待ち
敵の君臣和合しく。鄰國援兵多き時へ。間者を入る。之と離れ。或
己の怯弱を示し。敵將を慢らせ。其怠を攻る。兵法其數多し。皆
皆不意と撃計畧多し。然る破楚大將軍。淮陰の韓信。八馬の

皆不意と撃計畧多し。然る破楚大將軍。淮陰の韓信。八馬の

繪本漢楚軍談第二輯卷之六

早稲田 大學 図書館
昭 34.6.3 雙
藏 書

多配り既不定まり吉日とトセー其卦も又吉不遇の必勝の計決
 ねれば明日ハ爽朝ハ發途ベ一と使者を以て此由で漢王ハ奏一けるハ
 諸陣の大將と始とて部將士卒ハ至るまで大ハ驚き怪と相見
 顧見罵り合て言けるハ樊噲の掌職ハ棧道の修造を専ら
 催ふ一促せども未其功完くハ棧道の外とハ秦ハ入ハ道も
 元帥既ハ出陣の陣觸ありと聞つれど行ハ路もありハ最討
 ちたゆふハ疾く漢王ハ奏聞ハ王の出馬で止むハ諸軍より
 訴へけるハ漢王も此奏議で尤ありと思ひハ息き相國蕭何と召
 密ハ尋問ありけるハ樊噲ハ棧道の修補も未終らざるハ元帥奏
 あり朕と請ひ明爽兵と出さんと彼より使外で馳されど諸陣の大將
 疑ひて各ハ罵り嘲りて穂ありざる様態多し元秦の地ハ入るハ

行ハ道の有とも知らせハ然るハ韓信ハ奏聞ハ及びハ外ハ
 行ハ道あるハ抑亦如何多計あり卿早く韓信ハ陣營へ行
 縁故と委く探索来ると宣ひけるハ蕭何ハ勅と承り其夜
 則本陣ハ馳せ行ハ韓信ハ對面と問けるハ元帥俄ハ師と明爽
 御駕と促して東征せんハ奏聞ハ及びハ漢王の大軍もハ何
 より道と求めて進むハ往來道の無りハ出陣の支極まれハ王の
 御心最深く怪と疑ハハ元帥ハ尋常の人ハ非ざる事ありハ
 如何多計あり有るハ臣と尋問ハ願ハ未審と明白ハ
 と告げハ韓信ハ點頭ハ丞相ハ謂けるハ卿往ハ張良ハ棧道
 焼ハ時別ハ閑道あるハ知らざるハ有るハ今何故ハ殊
 更ハ問ハハ詰と曰ハ蕭何ハ答へて曰ハ往ハ日風聞ハ閑道の

有しと聞つれど未実地を踏ざれば其詳多しと知りしる事能
がら元帥今樊噲命を頼み棧道を修補せしむる事あり
彼と云ひ是と云ひ我心疑なり韓信の微笑て相問ふ答けし我言
と待せし卿も知し召せんが明な棧道で補ふ身で敵を示し
三秦の諸將とて急り備多し其虚を乘りて人知まば陣
倉の小路より馬を放て衝きせし士卒竊に進むは五日の内
散関へ襲入り秦の諸候驚き周章漢兵天下より下まると
怪と思ふ計りあり然時散関を取ると掌で指より易き事
多し願ふ此事を密に漢王へ奏聞し御心と安んじし蕭何大
喜びて急ぎ朝廷へ回りける夜深るまで漢王の猶木窓を
何が奏する趣を以て喜びぬと限りあり次の日大小の文官と

武職を引卒し已に褒中へ發途あり韓信此頃より訓練し
る軍卒軍馬四十五万と四隊に配りて旗幟強小多く之を靡
せば或は荷ひ或は寒き戟を持ち弓と携へ歩軍と先と馬軍と
後と軍威誠強く虎の如く龍の如く軍士の衆多あり
雲の方ふ起るが如く霧の始て集るが如く大将孫興と促し棧道
へ遣へし樊噲と代りし樊噲で第一隊の先陣と定められ猛
將を負せ指添て令を出し曰く九山小逢と云ふ木を斬て路を
開き水小逢と云橋を懸け人馬の通路と便多し暫も滞る
と有べし夏候嬰を擢んて第二隊と定めし猛將十負を指
添て其上に精兵と二千騎餘り授けし令を出し告げし先鋒戦
勝して急め兵を驅せ攻懸りて敵を挫き若し先鋒負るは

急きう小せう出しゅつ援えん。第三隊だいさんたいへ韓信かんしんが掌握てしやくの備そなへ。自みづか猛將まうじやう四十騎しじゅうし。餘あま右みぎ左ひだり引ひき卒そつ。兵へいて四面しめん分ぶん配はい。前まへ朱しゆ雀せつ左ひだり青せい龍りゆう右みぎ白はく虎こ後ご。玄武げんぶ四武しぶの備そなへ。或ある立たりれけり。第四隊だいよんたいへ漢王かんわうが本陣ほんちんと堅固けんこの備そなへ。大おほ小せうの百官ひやくくわんと右みぎと左ひだりと九く列れつ座ざと。傳つた寛かん周しゆ昌ちやう兩りゆう人にんと監軍かんぐん乃な職しやく小せう抽ひきて前軍ぜんぐん後軍ごぐんと顧かへりて軍中ぐんちゆうの緩急くわんきつと奏そうす。一ひとと一ひとの調度てうど既すでにな整ととのひれ。漢王かんわうへ東とう門もんより出陣しゅつちんありて最高こくわう高たか阜ふの上のうへに登のぼり。衆しゆ軍ぐんと望のぞみぬ。人馬にんば共とも強壯きやうじやうなり。前後ぜんご左右さうじゆうを整ととのむ。些ち少せうも乱らんる。隈かゝり。凛然りんぜんとて毛髮もうはつも振ふるふ。躰たゝ容ようゆる。王わう乃な左右さうじゆうを右史うしとて調度てうどの法ほふと書か寫しやうす。漢王かんわうに獻けんトけり。王わう乃な左右さうじゆうをあ披ひき見みぬ。法ほふ小せう曰いふ。按あ九宮きゅうきゆう四象ししやう八卦はつが五行ごけい十干じゅうかん十二支じふにし隊たい。

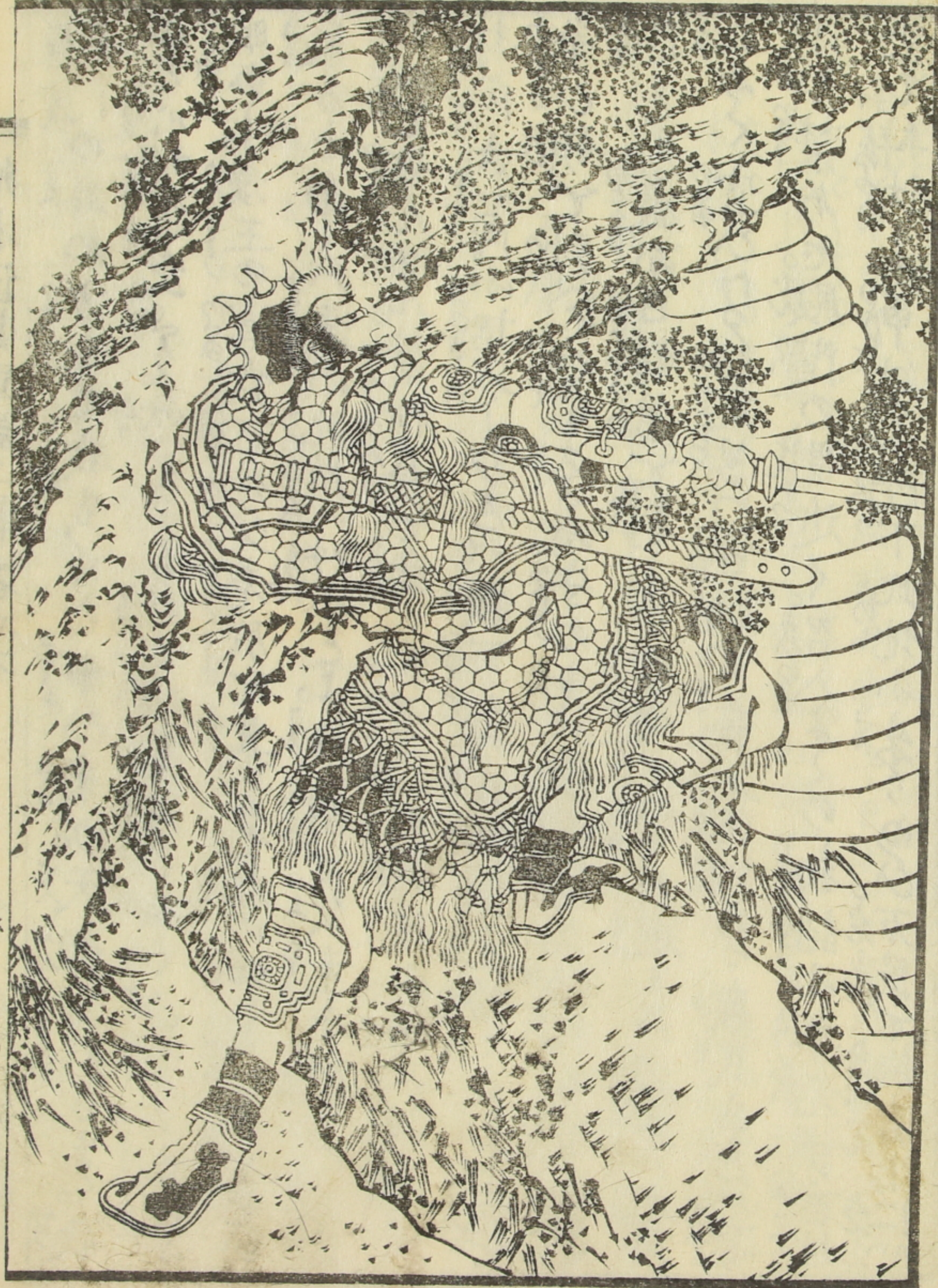
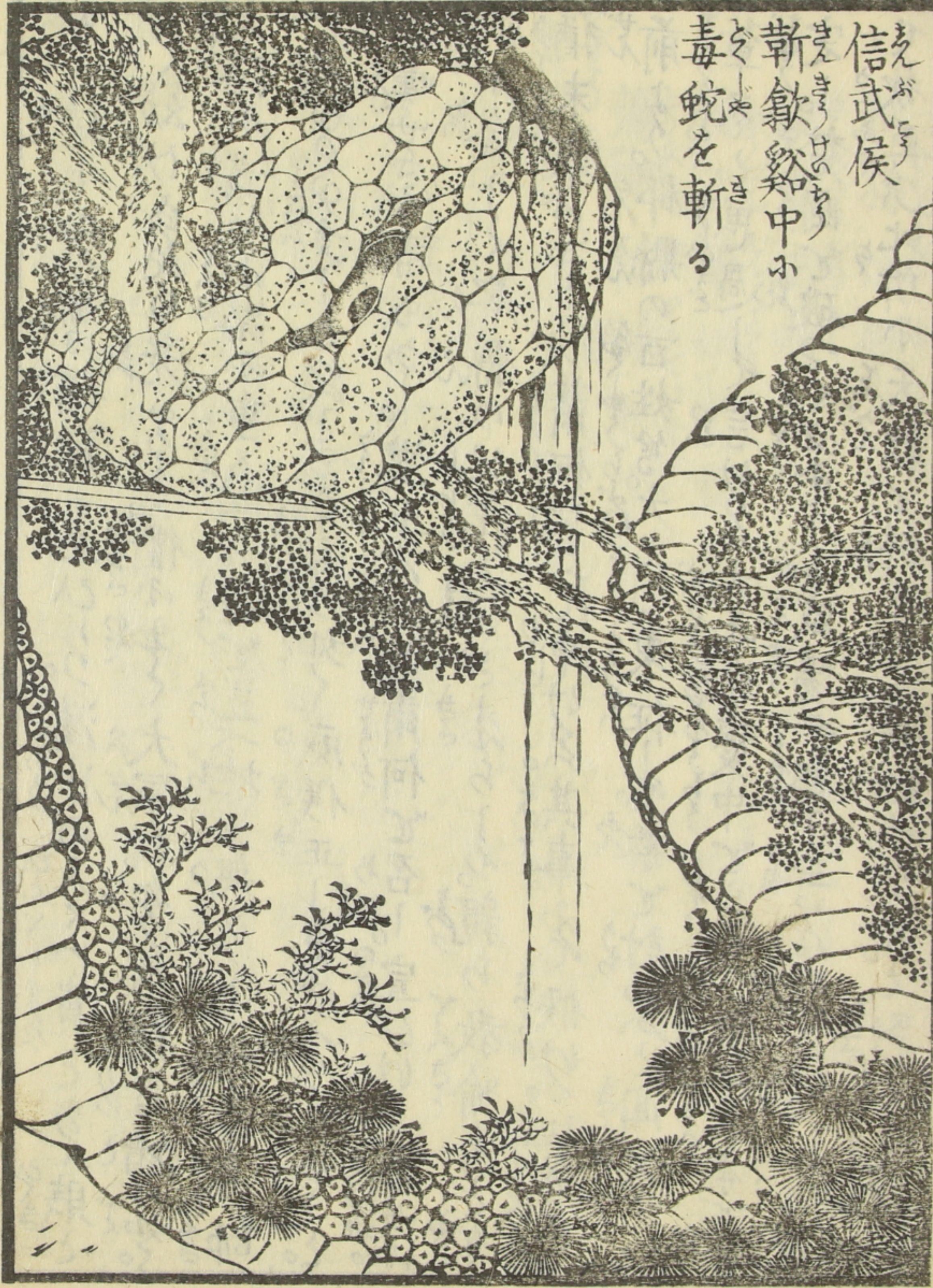
有あ陰陽いんやう陣ちん有あ前後ぜんご將じやう有あ紀律きりつ兵へい有あ隊伍たいぶ旗はた雖な尚なほ赤せき而を引ひ軍ぐん開ひら道みち者もの則すなは按あ五方ごかう制せい雖な爲な王わう而を威儀ゐぎ號ごう令れい則すなは專せん五伐ごばつ人にん各おの有あ能のう量りやう材さい而を用もち人にん馬ば廢ふ棄き隨したが長ちやう而を取と身み材さい長ちやう大たい者もの挽ひ弓きゆう拽ひ弩こ身み材さい矮わい小せう者もの持もち戟きつ持もち槍しやう身み力りき強きやう壯じやう者もの執しやく旗はた執しやく旗はた身み力りき少せう弱じやく者もの鳴な金きん鳴な鼓こ不な能のう視し遠えん者もの專せん聽しん號ごう令れい不な能のう聰そう聽しん者もの專せん望ぼう風ふう火か身み肥ひ者もの爲な馬ば軍ぐん身み瘦しゆう者もの爲な步ふ軍ぐん日にち能のう食しやく斗と粟ぼく者もの專せん爲な前ぜん驅こ日にち行かう二百里にひゃくりにり者もの專せん探たん機き密みつ灌かん嬰えい領りやう四牙しげ將じやう逐しやく隊たい前行ぜんかう張ちやう倉そう領りやう三さん文ぶん士し隨ずい軍ぐん後ご進しん陸りく賈け同どう二謀にぼう士し識し地ち利り之の險けん易えい。

叔孫通領八裨將一參行兵之可否盧縮斬
 歙為主將之熊罴薛歐陣沛為中軍之驍
 將三軍如虎士如雲鼓動神威昭萬象
 蕩開征旅起千兵
 漢王之之也大乃喜軍馬既此之如之無之難
 之將士也共乃才勇之也楚之擊破之難
 御心安之思之其時韓信奏之臣之大王
 二日先進發之大王之後陣之勢之率纏之徐之來
 臣先散圍之攻取之安然之大王迎之奉之疑之
 事勿也之言也推先陣之軍勢之指揮之前後次第之亂之
 之順之小線也既進發及之漢王之韓信之言也實也

もと信トあひ暫猶豫一王ひる。漢中の人々ハ貴トあき賤ト
 あく幼けあはも老らるも。懼小く大軍の如く。觀者堵の如く。
 大路小満ち小路小重疊り。錐で立べ地も無ろし。往古より師
 と用ゆり多し。今日之如く。威儀正し。兵をふるふ。と。
 感嘆せざる者もあ。漢王次の日。蕭何を召し。宣ひけり。朕先
 卿。小舎トく郡縣の父老を招ぎ。あらしめ。親ら教諭せ。と有。
 猶未來らざる。欽蕭何答へて申けり。其事也。候ける。此数日。以
 前より。郡縣の百姓等。大王の東征。秦を討めんと。聞父老の
 輩。尽く思過。と言ける。大王今褒中に出ぬ。速小。秦を平
 定し。楚圍を破つ。必む。咸陽小都。王らん。然る時。如何し
 て。欽。再び此所。天顏を拜する。と。孤。ぬげんや。と。駭く。連携て

會人漢書卷之六 五

信武侯
斬歙然中
毒蛇を斬る



朝門の外の方まで我もくと争ひ來り。天顔と拜さす。欲
 する心切ふるへう。然れども此日頃晝夜と無くのまゝ。奏聞小
 暇あり。漢王の宣ふ百姓父老朕と慕え。此の如く門外までも
 來るとあゝ速小此所へ呼入るとよ朕顔と父老小許して彼等
 の心と安んせん。蕭何命と蒙りて禁門の大使小傳へ朝門外
 打開き一同小招入しむと六百數百人の百姓父老紛々として先
 争ひ領て引べて望むる小守の吏へ渠奴倂が無礼も有んゆて
 恐るて巖小百姓等と制しや喧嘩と禁め廻ると云漢王の之は
 止めく宣ひけるは是等皆朕と養ふ大切ある衆民あると云
 小勿禁めを殿階の側近く召入よとの勅詔小年老る百姓
 ども拜伏して申けるは陛下此地小來りぬひ万民と撫育ド仁心

事下小施して風の五日小一度吹き雨の十日小一日濕ひ陰陽二氣和
 合して万民業と安んずると。堯舜の世小異あるぬ擊攘の民と
 あり。未長く洪澤小浴せんと思ひけるは圖らざりき今日茲小師を
 出して東征し。楚と平定しある。何の勝小歸りぬひて再び民を
 治めぬを厭ぬ名残の惜しさとと涙と流して慕ひなれば漢王
 諭して宣ひけるは朕暫師を出して楚の強暴と滅せし天下の民
 の塗炭を救ひ四海の内を安んずりむ。仁義の師小有けしは是
 亦已を治るふあり。汝倂業と安んぶ。今日の別とを云而己
 哀むとあると父老も申けるは陛下今日此地と離れ東方小
 之の如何ある人せり留守として斯民を治めしむや愁只此
 事と請奉ると申上と云漢王の宣り留守とする外あるは相

國蕭何と留め、並て此所を守らしめ。國事を彼に任まば、若し
 事あるに相國に頼む。汝、濟此少も患ひ勿と諭さば、父
 老等、之を聞きて、早喜び、之を以て額と打喜び、と限り、成雀
 躍申けり。蕭相國の守りあり、我等、暫く大王に別を、の哀しく
 共亦何の患ひ有ん、是亦大王の仁心、ありて、衆民の幸あり、萬歳世
 ぞと稱けり。實に蕭何、大漢の基と定、大、切、湯の伊尹の跡と
 踐、周の呂望の風を摸、漢の三傑の第一と。後の世までも、芳
 名乃傳り、一の理あり。漢王の嘗てあり、古の法、因て、卿、固の塊と
 正ふ。民をして安く、其法、十里を一亭と、一亭と、小亭、中
 の長を置、て、亭を治め、十亭と、一郷と、一郷の内、小三人の郷老
 を立置、て、一人の民間の法令と正さしめ、一人の耕作の事、成の

掌り。一人の郷間の。訴訟を決せしむ。此法甚守り、易く、人民皆
 服、後、一、此日、殊、小三人の郷老と召集へて、誥文と認め、告
 示、を、辞、小、曰、

朕、惟、古、先、明、王、之、治、天、下、也、以、安、民、為、務、
 而、安、民、之、道、以、教、化、為、先、是、以、上、下、相、承、
 風、俗、淳、厚、一、國、和、平、臻、於、至、治、朕、自、治、國、
 以、來、夙、夜、倦、々、志、圖、治、理、建、都、南、鄭、思、與、
 百、姓、共、臻、於、道、以、及、天、下、而、為、一、統、以、此、
 特、加、曉、諭、使、知、下、為、善、去、惡、趨、吉、避、凶、而、永、
 保、身、家、之、道、如、居、家、者、有、一、家、之、長、居、鄉、
 者、有、一、鄉、之、長、為、一、家、之、長、者、訓、教、子、弟、

續本漢書卷之六 文選卷之六

講讀詩書。明達道理。父慈於子。子孝於父。
 兄愛於弟。弟敬於兄。尊卑長幼。各循其序。
 母相凌奪。使一家之內。仁讓浹洽。親睦相
 和。便為一家之福。為一鄉之長者。勸其
 鄉之內。士農工商。各居一業。士則修明義
 理。勤習課業。農則力於田畝。無欠賦稅。工
 則專藝術。母作淫巧。高則用心。生理。母為
 遊蕩。大小相安。長幼和睦。母爭鬪。言訐。而
 陷於刑戮。母賭博。淫佚。以墮干凶德。母游
 手好閑。以廢其生意。母竊取人物。以陷於
 死亡。出入相友。守望相助。婚姻死喪。鄰保

相資。如此則一御之內。禮樂雍容。風俗淳
 美。富壽安佚。共享太平。而為一御之福。故
 曰。作善降之百祥。作福降之百殃。善惡之
 報。不差毫釐。朕今約法三章。見有定律。使
 宣爾等。來倦々。開諭者。正欲爾等守法。奉
 公。咸歸良善。其有不遵朕誨。仍蹈惡者。明
 有國法。暗有鬼神。罪亦難逭。爾等欽之。守
 之。勿忽。故諭。
 誥文既了。百姓皆小酒。賜以食。與之慰。勸小
 御。食忘。暇。賜以悉。御。歸。何。を。口。て。宣。ひ
 ける。卿。の。獨。褒。中。の。留。主。の。職。を。掌。り。百。姓。を。治。む。べ。し。

繪本漢書卷之六

たはとあはあはと農桑をよく勸め刑罰を省き税斂を薄くするを本として善を挙げ悪を懲り軍中の兵糧と絶するを送と續けよ兵糧許すあはと大軍の士卒皆飢ふ及び戦ひを得んことを欲まといふとも及ばざる中あは敵も勝も敗るも只卿が兵糧を送ると送らざるのとあり勸めや務むべしと嚴命あれば蕭何も亦再許して日を中臣謹んで王命を養る願ふ早く捷軍を報ト知らせぬべし臣不敏なりといふとも國事の勤め大王の靈威を藉り治むべし必ぎし御心を勞いぬと勿とと自任の言を漢王も最吉せぬひけり時小大漢の元年乙未秋八月朔日漢王自ら三軍を引率る

て庶民中と打出ぬ蕭相國の諸官人と伴いて遙東門の外の方まで漢王を送りまると郡縣の百姓父老の徳を慕ふて別と惜と三軍の押行へ道を遮り哭さければ漢王も父老の真情と怒りて亦心とと去ると惜ぬと限りぬとやあれ心強く父老と俤と打棄て東方へ赴ぬ蕭相國も別と告留守の諸官と携て庶民中へ返り来て境界を堅固し守の兵を指置て万民を安堵せしめ是より後へ他事を棄れ兵糧の運送と専一力を尽し大漢の大軍を安然と養ふの事との計りなり實に蕭何の大任に却て戰場に出入りして元帥の職を勤るよりも一段増て又重功勞ありける這も又漢の天下を統一統せし後其詳を説明せん

第四十七回 辛奇怪力斬虎遇韓信

再說元戎韓信の漢王より二日先小軍と率ひて進まけは、樊
 噲が修復せし棧道への向ひまじく、道を替へ陳倉の間道より押
 行て狐雲雨脚の山を登り、山の後の谷際より辛うど進み行ひ已
 樊噲が先鋒の勢前ありて路を開く、夾江の水浩浩とて寒
 溪より流るゝ勢ひ甚だ急なり。大石とも轉ばせ、人馬共小渡
 ると、得きりける容態、比皆途を失ひて見え、おけまじと、樊噲敢て恐
 る、色るゝ、命を下し、鐵鎖を以て角ある石、或はまじ、縊まじ、大石を
 集めて之を敷系に合せ、兩岸の大木へ敷系に、苗まじ、上流より轉り来
 る石のみる、此所小淵、見る内、一行の石堰と、るり、ぬ、卒
 手々、石を運ひ、之を思、宜め、忽地、大軍の通、るべき、石梁
 と、そ、做り、おける、漸々、おし、て、此水を渡り、過せ、縋、あ、る、通、る、べき

路絶て、断岩、苔蒸、く、高聳、へ、絶壁、烟生、と、前、小、當り、屏風
 を、立、さ、る、如、く、お、れ、バ、長、き、繩、と、奉、下、し、之、小、携、り、魚、貫、く、千、辛
 万、苦、小、進、ま、行、く、五、里、計、り、過、け、る、小、淵、き、路、小、お、なる、樹、木
 枝、と、交、へ、く、生、茂、り、往、來、の、路、を、支、り、れ、バ、樊、噲、兵、と、下、知、り、
 悉、く、砍、削、き、大、軍、と、押、行、け、り、韓、信、諸、將、小、申、け、る、我、往、日、只
 一、騎、夜、中、より、逃、ま、じ、時、夜、中、小、此、寒、溪、の、河、邊、小、来、り、一、折
 節、小、秋、水、盛、小、漲、り、溢、ま、じ、渡、る、べき、様、あ、る、を、ける、小、蕭、相、國、の、追
 蒐、て、来、り、我、を、伴、ひ、り、那、時、若、此、河、を、渡、ら、バ、今、ハ、淮、陰、の
 故、郷、小、立、歸、り、許、由、巢、父、の、跡、を、追、お、て、無、懷、の、民、と、多、く、ま、じ、
 國、り、ざ、り、き、大、軍、と、率、ひ、て、再、び、此、河、を、渡、ら、バ、汝、は、ん、と、い、て、申
 乃、ま、じ、諸、大、將、同、音、小、答、へ、て、曰、是、誠、小、天、命、と、て、必、ぞ、し、も、元

帥て此所必留り。大漢の世と興さんと意あり有らんずらん然らずんば機道の既絶へ出づるべし。別此間道の有るを知者る事。我輩へ尽く。褒中死果て空く此世で過べん。斯る盛事。不遇んと奇持とも謂り。元帥の天方の固より有る事。あれども。相國若元帥と抑留するところ。空く淮陰小帰り王ん。畢竟ま。相國の功勞あり。斯る奇遇の大美事。其終棄置べんこと。後代不傳ん。山頂小石を建。寒溪水長蕭何驅馬邀韓信と十一字と勅し。此地の險阻。地の下。入る如く。鳥も翔る。獸も走る。路の深きこと。九攀り葛小推り。上下貴賤の差別多。路行との艱難。却而

言小迷。千辛万苦。多け共。故郷へ返ると樂し。心慰め。氣を勇と勞と忘。て行。先鋒あり。士卒皆群。と走り来り。愕。告け。乱山深溪の間。當り。最可畏。大蛇あり。兩の眼。日月の光り。を放ち。紅の舌。吐け。腥風。起。人。毒。進。道。驚。言。韓信。自若。多く取敢。射者百人。擇。令。下。言。毒蛇路。塞。と。あ。山。際。身。掩。鏃。菜。塗。付。一。射。落。毒。蛇。若。飛。射。取。過。失。大元帥の命。令。諸人。充。同。一。人。進。申。澗。令。大蛇の路。支。往。来。塞。何。若。干。人。用。滄海の蛟龍。我。敵。願。只。一。人。路。當。り

一乃小毒蛇と斬て大軍の行路を閉ると大音小述るを
 諸人驚き誰あると打をよび乃是信武侯斬歎あり韓信
 大ふ喜びく。斬歎小告ける郷の力の実は大蛇と屑とせば
 然りとりども此深山下濕の地の常々人の往來も遠くく
 瘴氣多き処あり大蛇の毒も多うん。恐らく毒氣小中ら
 酒の百葉の長小く。邪氣を掃ふの良劑あり。之を飲て行ぬ
 と巨觥をよびあべ。斬歎へ依びく。元帥の賜あり。何辞するこ
 とゆへいと。三五杯を傾けて其座を辞し外小出で士卒四五人
 引連して山前小到りける。涓くとく清水流と。岸下小月光
 輝きた。時ありさる電光の赫くとして閃きける。一陣の腥風鼻觀
 と衝き。寒氣凜然と肌を侵し。毛髪も振つ計りく士卒

皆怪て。岸下小月の出づる。如何あると尋じ。乃郷導官申
 ける。岸下の月の大蛇の眼電光の閃く。舌を吐く光りあり。若
 前小近づ時へ氣を噴と雲の如し。此氣小觸る人へ皆忽命を
 失ふべし。將軍只歸りぬ。空しく谿中尸を棄るこあるべし。斬
 歎へ大ふ怒り。大蛇と恐とて空しく。歸るべきありれば始より
 此所へ足と向け申すま。臆しうとゆへく。速小退治し。元帥小
 報ずべしと。劔を抜て洞へ下り喚ひ。鬼と岩下より。大蛇へ怒れ
 眼めて三丈計り頸と延べ。縷の毒氣を噴き。紅の口を閉き。吞一
 呑んとする。狼斬歎閃りと傍多。大石小飛上り。喚一喚。声雷の
 如く。只一刀小大蛇の頸と。洞底へ斬落せ。林木俄小動揺し。大
 地も震ふ。洞水の血を漲を計りあり。諸軍勢ハ是と見え。

斬うや斬うと。驚嘆の声止ざりたり。士卒の先で争ふて。こと紙
 えんと集り合ひ首尾の様態で熟視せし長さ七丈餘りふ
 る。岩と纏て死しうけをゆふ増て最怪しき大蛇もあまふ
 有りの歎実未嘗有の物哉と。皆口く物と鋪暫の間動揺
 り死けるふ。韓信さまを敬馬くば衆ふ向ひて言ける。崑崙山其圍
 り三万里の山あれど。上古より此山と一周ふする大蛇ありと人口傳へ
 らる。今此の如き大蛇ありも。怪しむる足らざるあり。我往日楚で逃
 る。漢王の反する時。只一騎此所を過し。幸ふ此毒蛇に相遇てを
 ぬさる。倘其時出遇ば必ず彼に害せらる。今日に至るとは。且
 此回斬歎が功勞ふ非だんば衆人多く害ふ遇ひ。通行も滞りんと其
 功で賞美し人馬を進めて太白嶺に稍近き処に至り。大将盧縮を

召寄せて令て下し。曰ける。我嚮に褒中へ入らんとせし。小太白嶺
 の下ふ。辛奇と云者小遇り。其人義氣盛んなり。我を留て一宿
 せし。兄弟の約と結び後日小會んと折言ひたり。其家最貧ふと
 酒と賣て世と渡り。卿我小先立て尋行て此由と。其人小傳は
 我必ず對面して昔日の恩と謝せん。盧縮の命と諾り。五六騎を引
 連て。道と急ぎを行ける。須臾ふして馳回り。我太白嶺の下に至り
 此所彼所と尋める。人家とて一宇もなび。平原州平ふ。露
 瀼く。麋鹿。呦呦と。声滿野。人跡も稀ありける。一人の老翁の
 菜と採る小遇ける。故幸ふと尋ねれば。去る七月上旬。大雨頻ふ
 降續き。山水俄ふ溢。山と懷ね。陵ふ上り。人家一時小押流され
 此地小住居り難く。皆山の北小移り。是故小詮方多。罷反り

候と告まへ韓信嘆息して自ら来り尋ねる果して始めに
 覚へし人家一字も無り一ふ力及べど一日路足を進めく乱石灘
 の石梁を過ける不豈國んや向ふある山の尾より一人の壮士が戈を
 携へ髪逆立て冠を衝き鬚の蝟毛の乱る如く怒まる眼の鏡を
 懸け喚く声の鐘を叩く猛威を振ひ飛が如く虎を逐て馳来
 る兵共の是を逐て逐て虎を打止んと戈を揃へく取圍む
 流石小猛き虎さゆも逃るべき路あり夫とて最峻き岩を
 肥を懸くと一声吼て威を震ひ彼壮士小飛懸り一啣啣んが勢小
 壯士の飛遠へ戈を延べて怒り小怒る猛虎の項を一突小突徹せ猛
 獸へ愈怒り益吼一倍の力添踊り揚り跋翻る強壯士の戈を抜
 軽捷も又猛獸の咽喉を目當り過ぐ突徹せ六戈鋒の奇怪

べ一最小き岩をも貫き多兵共の簇集り手く小戈を携へて乱
 突小突殺を徹韓信の其挙動をえり大に驚嘆し自ら馬小跨
 りて進んで壯士と熟視も乃是韓信が尋ね求む一個の壯士
 太白嶺の辛奇あり這般如何小とて對面する辛奇可い驚き
 拜伏して韓信小申ける其此項棧道の修復頻小有る由を
 承り候へ然に往日一面の折節約束せ如く將軍兵強起し
 の楚國を征する大望を决断して打立せぬらめとふのくら
 夜て日小継ぎ速小幕下へ参向はんと朝多夕の赤心小ぬ
 へ有ねども未だ老母小告るゆてゆざら故小延引せず不圖今日
 茲小相逢とてゆべしと豈幸とふべきぞ臣が平生の志小合ふ
 と喜ぶと限りあり韓信も馬より下り牛づら辛奇がを握



繪本漢文軍談二輯卷之二



太白嶺たいはくの不辛ふしん奇き
猛虎まうこを突殺つぎころと

繪本漢文軍談二輯卷之二

慙歎うれふ日ひけるへ。汝なんぢ別わかれ告つぐ。漢かん王わうの奉ほう事じして。軍ぐん勢せい小せう退たい
 るら。昔むかし問とて絶たつら。昨日けふ這こつて過する折せつ節せつ。太白たいはく嶺りやうの
 下したと尋たずねるら。水みづと避さひて家いへと移うつせ。此こゝ因よりて何なにとも。尋たずねべき様よう
 ろりけるら。幸さいふら一いつ面めんとびるら。この喜よろこぶら。我われ往まりて足あし下したの思おもひ受う
 て兄弟けいぎの契せき約やくと成なれ。家いへ小せう立たち寄より。年とし老おいし母ははと拜まがり奉ほうじ
 辛しん奇き答こたへて。けり。將軍かんとへ今いま天下てんかの元げん戎じゆう往まり。日ひ准じゆん陰いん小せう漂ひょう泊ぱくせ。
 御ご身みと替かり。軍ぐん争せうう。能よく身みと輕かろく入いり。匹ひつ夫ふの住すまひを茅かや屋やへ入い
 る。このあつつまき。勿なく体たい無なきとぞり。此こゝ義ぎの緩ゆるさをひねり。辞ことば
 すれば韓かん信しん頭あたまと打うち點ち否いなく。我われ身み往まりて。思おもひ信しんと忘わすれぬ。何なにを今いま
 の勢せい小せう拘こるら。この有あべきやと。十じゅう騎き計けいりて率ひら連れんて山やまと踰あり。三里さんり斗とう
 歩あり。連れんべ高たかき崖がきの麓ふもと。民たみ家か十じゅう軒けん餘あまり。軒けんと並ならべり。列れつせり。

辛しん奇き柴さいの扉ひらと開ひらき。韓かん信しんと迎むかひ。元げん帥すい既すでに草くさ廬い小せう入い
 る。老らう母ぼと拜まがりて。礼らいと行ゆく。辛しん奇きが妻つまと呼よび。銀ぎん百ひゃく兩りやうと頒はり。
 与より往まりて。思おもひと謝あやまる。老らう母ぼも性さが忠ちゆうなり。合あはるら。心こゝろ多おほく入いり。あれ。

堅かんく是こゝ辞ことばしけるら。韓かん信しんの肯うむ。是こゝ皆みな漢かん王わうの賜たまひ。母はは成な

養やしやうふ資しのとせよ。辛しん奇きの我われ小せう從じゆうひ。楚そ楚そ伐はつちて功こうと立たり。石いしと

天下てんか小せう頭あたまをへ。此こゝ処こゝ山やま深ふかく。人ひと跡あと遠とほき。所ところあま。老らう母ぼと置おき

地ち小せうあ。我われ告つ文ぶんと認まめ。丞じゆう相しやう府ふ小せう訴そへ。老らう母ぼと南なん鄭てい小せう

徙うつ移うつして。朝あさ夕ゆふ安やすく。養やしやうふをむべ。辛しん奇き喜よろこぶ。小せう堪かんん。再また拜まがり

して謝あやまる。韓かん信しんが申まをす。足あし下したの母はは乃すなはち我われ母ははと拜まがり。

置おく。足あし下した我われ後あとに。東とう小せう向むかひ。征せいする。何なにを此こゝ山やま中ちゆう小せう田でんり

置おく。軍ぐん政せい司し小せう命めい。汝なんぢ傳でんへ。告つ文ぶんと記しせ。早はやく

新本漢書卷之六 十七

老母て南鄭へ徙移させん官禄と与へて養ふべき由丞相
府へ曰遣へ。其支度て調へんと命トられ辛奇ハ更あり。老
母及び妻も共小稽頼て其辱と拜しけり。辛奇ハ不圖采利
て以て身と立る時来まじ。朝夕側を離れず。奉養と竭
せり。今より老より母小別りて。最哀し。思覺とも。元帥の思
我も又一方あり。厚けし。是も亦點止し難く。涙を流して老
母小向ひ別れ。惜と立難し。老母ハ言辞正し。辛奇小向ひ
申けり。汝何ぞ阿女と。舖大元帥の陣小猶豫するあり。あ
今日不圖も元帥の思我小依りて身と立。又老朽し。此母も
官禄と賜り。事。求めても亦逢難き。辛奇有ん。早元帥
小従ひ。戰場も功名せ。此上も無き。孝行あり。汝が妻ハ平生

より。我小事と柔順も。孝心深き者多れば。後安く。必
必ぎ逢息ま。正しき言辞小辛奇ハ稍志を激ま。別
別れ。告て我妻小向ふ。再告る。我元帥小従ふ。身と立る
の兆多れども。戰場小向ふ。時ハ生死存亡天小在り。之と
母を棄るふ似れども。元帥の思我ハ亦漢王の賜あり。志
重きと泰山も之小如び。謂ふ。忠孝両つ全ふ。最成難
き。ゆふ。然ハあれども。身と既小。君小奉。上く。私
以て公の義と。突す。士のあ。非ざれば。我ハ必ぎ元帥小後
楚小之ん。汝能平生の節義と守り。老母小事。事毎小背
と勿る。韓信と共。太白嶺と打立。韓信辛奇小
曰ける。此所より散関ハ二日路と隔れば。敵の未知る間小

足下と卿道すとて。樊噲と共く小路と急ぎて。驀直小散関へ
 攻懸も若急小破りゆず。我到るを待ねり。辛奇令と受マ
 め。樊噲と一同小散関へと急ぎけり。韓信の第二隊の夏侯嬰
 と召寄り令と傳へて申けり。足下へ先陣小續いて兵と進突し
 樊噲が散関へ攻懸る。合圍小して。陣壘と構へて軍馬と息め
 少も動ぞ氣力と養ひ。樊噲が散関へ敗れ。後中又足下と先
 陣とて廢立と急小攻めて。章邯と戦へて。樊噲と第二隊と
 多く力と添へ。夏侯嬰の命と受け。我陣小及びけり。韓信の
 卒小命下。漢王の消息と伺へて。寒溪と渡り過て。徐と
 来りぬ。とやむゆ。韓信の兵と進めて。三金山小到りけり。諸大將
 小中けり。往日我楚と逃。漢小反する時小當り。此所ゆ。路小

迷ひ。困ト果て在ける。偶樵夫小遇。故路と問ふて。行先と知
 へ。追人頻り小蒐りけり。若や追人の者共。樵夫小
 尋ねて。我跡と慕ひ来りぬ。おと。逃る小路あり。と思定め。と
 情多。樵夫と殺し。路傍小埋め。土と掩ふて走り。今日之と
 弔ふて。其恩と謝せ。樵夫も永く黄泉の下。怨と抱く
 べし。士卒小命下。這処の物。駢し人を召び。棺と造り。屍と掘り
 出さ。三金山の松林小改葬し。石と置。墳と築。其小
 石碑と建て。大漢元年乙未。秋八月七日。破楚。大元帥。淮陰。韓信
 爲義士。樵夫立。と十六字と鑄。勒て。諸大將と共小祭と設け。
 周奇小命下。祭文と讀し。其文小曰
 大漢元年。歲次乙未。八月十一日。壬戌。破

楚大元帥韓信。謹以牲醴致祭。干三岔山。樵者之靈。曰。嗟爾樵者。遭世蹇。地資身。無策入山採薪。逢干問路。指示要津。楚兵或至。恐道往。因絕計。斬爾。定傷我仁。覆土為記。慮防水濱。循途適漢。素志乃申。職專閭外。兵下三秦。道經岔口。改葬爾身。師行勿劇。未獲報君。君其有知。鑒我真純。尚享祭文。捧げて慇懃祭り了りて。此處の農民小令て下し。新小廟て造立し。四時の祭り怠り。言ひき由て命づけ。庶民皆力て竭し。日あつて成就多。遠跡猶後世小残り。今も在とぞ。豪傑の士へ必ぞ一飯の思ても報下。睚眦の怨も

報也とぞ。怨もとて。報せむとも。思て必ぞ報すべし。施報の道又忽ふすべし。ば

第四十回

周勃陳武擒章平

然而散関の大將章平の毫釐も用心する者多。軍中の事皆姚龍靳武の兩人へ任せ置きて自ら酒を飲み肉を食ひ晝夜と多く酒宴小溺も時々人ておきしめ。棧道の様子と伺ひ風用成聴しむ。此項漢の大將小孫興と云一人樊噲小代りて猶棧道と修復する。人夫次第小減少し。悉く疲乏苦。成就の程も計り難し。然りといへども漢王ハ出陣の沙汰あり。棧道城通るべき命令ありと承ると告む。姚龍申ける。漢の兵出るといひ皆虚説ありん。靳武曰。襄中より治まりて。漢王ハ心乃休小

樂あつふあつ耽あつるあつのあつ。豈あつ遠あつ大あつのあつ志あつ有あつんあつやあつ。章あつ平あつ突あつ申あつけあつつあつ。然あつとあつ有あつんあつ。
 漢あつ王あつのあつ。輕あつくあつ敷あつ韓あつ信あつとあつ。用あつひあつくあつ大あつ將あつとあつすあつるあつとあつ。えあつふあつ人あつとあつ知あつらあつるあつ證あつ。
 扱あつありあつ人あつとあつ知あつらあつばあつ。小あつ國あつとあつ治あつめあつばあつ。怨あつをあつ成あつ懷あつくあつ者あつ多あつしあつ。必あつをあつ亂あつのあつ。
 階あつとあつあるあつ。況あつやあつ三あつ百あつ里あつのあつ。棧あつ道あつとあつ修あつ復あつすあつるあつ。小あつ彼あつがあつ如あつくあつ。少あつ寡あつのあつ人あつ。
 夫あつとあつ用あつひあつてあつ。何あつもあつのあつ。羊あつふあつりあつ。亮あつせんあつ。漢あつ王あつ。殺あつ令あつ攻あつ來あつるあつ。共あつ我あつをあつ。
 畏あつとあつんあつやあつ。日あつ毎あつ。小あつ酒あつ。小あつ耽あつりあつ。居あつけあつるあつ。小あつ忽あつ早あつ馬あつ。馳あつ來あつりあつ。章あつ平あつ。小あつ。
 奏あつしあつけあつるあつ。只あつ今あつ。漢あつのあつ。大あつ軍あつ勢あつ。何あつもあつ出あつるあつ。狄あつのあつ。知あつらあつねあつどあつ。此あつ外あつ。
 五あつ十あつ餘あつ里あつ。隔あつちあつるあつ。野あつ。野あつ。山あつ。小あつ。大あつ軍あつのあつ。透あつ間あつもあつ。多あつくあつ。滿あつちあつるあつ。先あつ。
 鋒あつ第あつ一あつ隊あつのあつ。剛あつ將あつ樊あつ噲あつとあつ記あつしあつるあつ。大あつ旗あつとあつ先あつ。小あつ建あつんあつ。五あつ万あつ餘あつ騎あつ。
 ぬあつ攻あつりあつ。候あつひあつけあつりあつとあつ。許あつしあつるあつ。章あつ平あつ。狼あつ狽あつとあつ取あつ物あつもあつ。取あつ敢あつとあつ。只あつ。
 管あつ驚あつくあつ。木あつ。下あつ。りあつ。ぬあつ。姚あつ龍あつ。斬あつ武あつ。小あつ向あつけあつるあつ。漢あつ兵あつのあつ。何あつ所あつ。ありあつ。狄あつ。斯あつ。

速あつふあつ。出あつるあつ。ぞあつ。防あつ禦あつのあつ。備あつ。如あつ何あつすあつべあつしあつ。とあつ。兩あつ人あつ。共あつ。小あつ。言あつ。辭あつとあつ。奔あつへあつ。
 漢あつ兵あつのあつ。來あつるあつ。とあつ。小あつ。恐あつらあつるあつ。是あつ。傳あつるあつ。者あつのあつ。誤あつりあつ。ぬあつ。候あつ。えあつ。棧あつ道あつ。
 未あつ。完あつ。るあつ。ばあつ。漢あつのあつ。兵あつ。如あつ何あつしあつ。來あつるあつ。とあつ。強あつ。はあつ。べあつ。けんあつ。やあつ。推あつ。量あつ。すあつ。るあつ。小あつ。樊あつ。
 噲あつ。があつ。棧あつ道あつとあつ。修あつ復あつすあつ。職あつ。分あつ。小あつ。當あつるあつ。とあつ。いあつ。どあつ。もあつ。成あつ。難あつ。きあつ。小あつ。苦あつしあつ。
 疲あつもあつ。逃あつれあつ。來あつりあつ。己あつ。方あつのあつ。陣あつ。小あつ。降あつ。參あつ。すあつ。るあつ。ぬあつ。ぞあつ。有あつ。べあつ。けんあつ。再あつ。びあつ。能あつ。虚あつ。
 實あつとあつ。えあつ。んあつ。其あつ。後あつ。小あつ。兵あつとあつ。催あつふあつ。防あつぐあつ。小あつ。何あつのあつ。遲あつきあつ。有あつんあつ。とあつ。時あつ。刻あつとあつ。
 移あつしあつ。猶あつ。豫あつ。すあつ。るあつ。小あつ。俄あつ。小あつ。潮あつのあつ。湧あつ。ぐあつ。如あつくあつ。四あつ。方あつ。ありあつ。喊あつとあつ。作あつりあつ。鼓あつとあつ。打あつ。
 愕あつ然あつとあつ。小あつ。姚あつ。龍あつとあつ。斬あつ。武あつとあつ。小あつ。向あつけあつるあつ。云あつ。小あつ。殊あつ。既あつ。小あつ。息あつ。小あつ。迫あつ。ねあつ。りあつ。早あつくあつ。
 三あつ。秦あつ。王あつ。小あつ。告あつ。りあつ。救あつ。ひあつ。強あつ。求あつ。めあつ。堅あつくあつ。守あつ。らあつんあつ。我あつ。先あつ。獨あつ。人あつ。數あつとあつ。率あつ。打あつ。てあつ。
 如あつ。一あつ。軍あつ。敵あつ。小あつ。當あつ。りあつ。其あつ。銳あつとあつ。挫あつ。きあつ。一あつ。先あつ。追あつ。散あつ。さんあつ。汝あつ。二あつ。人あつ。のあつ。力あつ。強あつ。

戮せ堅く四門を守るべし。敵の為小襲と勿。姚龍答へて中ひつ。少も怕とあつる。其常小千餘人の人数と分ちて晝夜とあり。四方と巡りて備へむ。何敵小襲つる。怠惰の有べきや。君息及こと有べし。章平の兩個の言辭と聞て大い喜び自ら心と勵し。三千餘騎を引具し。関門と関きけし。樊噲大音揚て敵小向ひて申ける。章平司馬欣董翳の三個共小是。謀佞奸邪の小人めて忠も無き。多くして自ら身の利と貪りて。秦の士卒共万と詐誘して項羽を殺させ。其事と功小く命と助る而已る。妄ふ三秦の王とあり。富貴と竊とて驕奢小耽り。万民と其罪逃ると能む。今天漢王小命と下し。愚民無と小人併と討さむ。大漢義軍の第一隊先鋒の

將樊噲あり。今既小此所小来れり。汝早く門と関いて。我陣小降らざんべし。一人も違り多く。頭と刎んと罵し。章平笑て曰ける。漢王の沛邑の亭長より暴小身と立て。褒中 small 封せられて。心尚厭足と知らば。兵と出と命とも失つんと欲する。樊噲大小怒りて起し。刀と舞して打と懸。章平へ鎗と取て無二無三小突入る。小縦横無尽小合せ戦ひ。二十餘合小及び。章平平へ叶い。逃還らんとする處と。樊噲へ逃さ。驀直小追蒐れ。辛奇兵と駆立て。太白嶺下の辛奇ありと名乗蒐く。進む。章平が手勢併に残り少小打敗られ。関内小逃入り。門と関て防ぎけし。樊噲へ関門の近く兵と寄せ。令城下し。弩弓と火箭と。打蒐け息張も継む。攻立とも散関へ四面

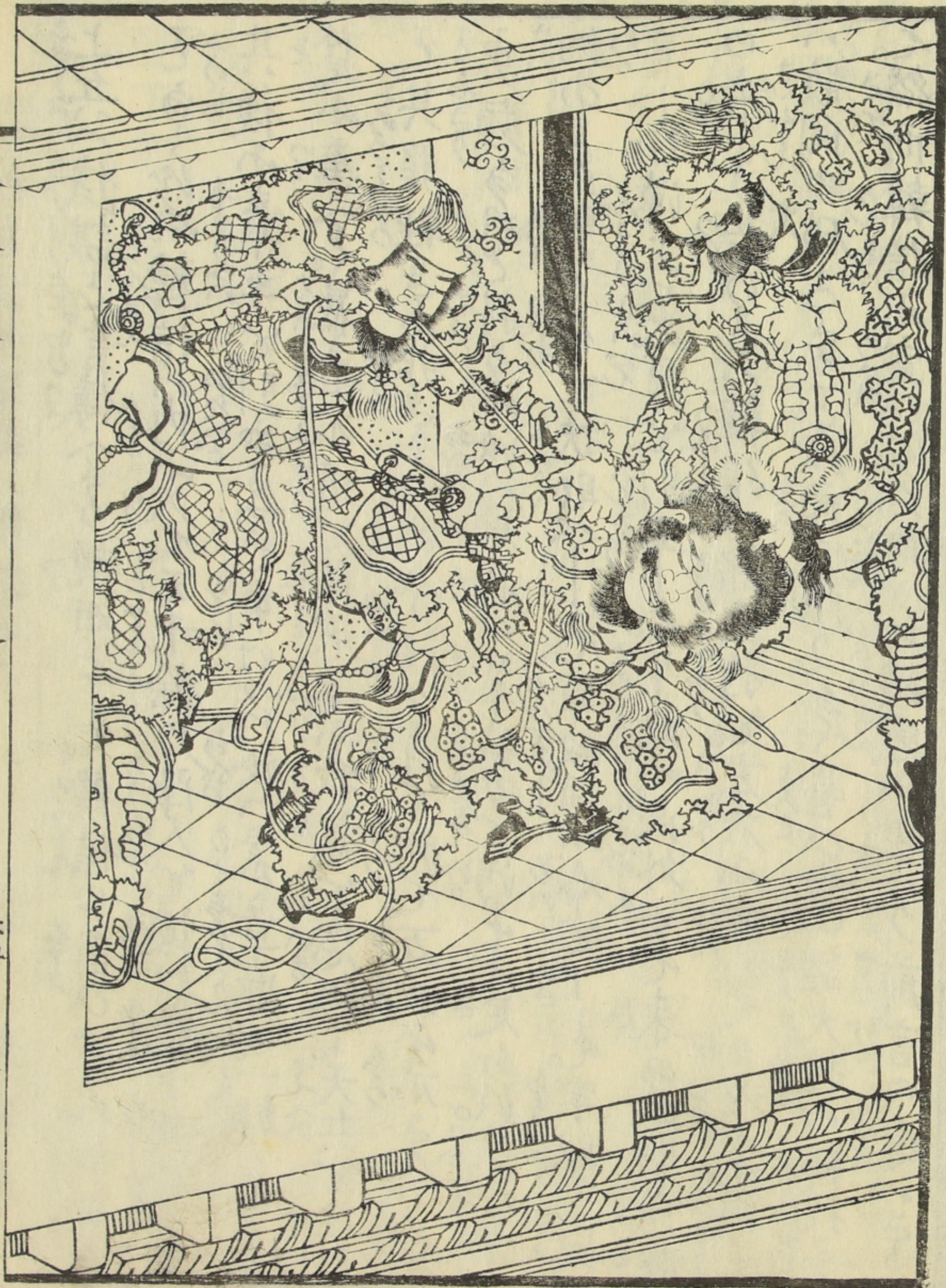
我々る巖めて天然の城廓とも去べき要害堅固の地多れば
 破るべき術も多し。流石勇武の樊噲も厭を果する計り多し。時ふ
 元帥韓信の軍勢来ると告げしに、樊噲辛奇出迎へて韓信
 の陣へ行き、軍の様子逐一語りければ、韓信へ山に登りて四
 方と望み散関の旗色と見るより、心中大に喜び、章平既小我
 計に陥入らうとて大軍を令して一奔ぬ、火箭を射りて弩を放さ
 せん。陣中俄小騒ぎ立様子で目づけて十餘座の風火砲をまゝに
 一奔ぬ。放ち掛りし山崩れ崖破れ、城中の兵共い上と無
 下とあり。老方も壮方も震ひ戦き狼狽へ上と下と混乱す。兵
 制すれども用ゆる者多し。詮方多くぞとへふ。散関の大將と
 章平の愈驚驚き、日來酒宴小耽り、遊樂を極めし身も、今に

却て仇とありて、士卒の怨を妻けまへ下知と下せど心より用
 者へあひれども、章平の威猛高小兵を令して堅く守ると、韓信
 自ら馬を知り、関門の前小至り、大音揚て云ゆる、関を守ら大
 將ふ一言で申さんと呼ぶ。けし、章平へ之を聞くと、矢倉小上れば、
 姚龍、靳武、西人の百餘人の士卒を引いて傍小立並びけり。韓信鞭
 と振揚て、章平小申ける、項羽暴虐無道小しく、民を虐げ上
 城茂を列候の約小背き、自ら位を竊と取り、却て義帝城弑
 殺も、是を以て天下の人皆齒を切り臂を攘げ、其不道と討ん
 とまれど、暴威小畏して誰有て魁先と為と者多し。今漢王へ仁
 と守り、義を踐ぬ大君あり、身の為小利を取ば、天下の民の塗
 炭と救ひ、天討の兵と起し、項羽の罪と正しぬ、汝亦無道の主小

与して悪て輔たすむ。同く逃にげる罪人つみびと多おほく。速過すみとほと改あらためて大漢たいかん小下せうかり
る。其罪そのつみと赦ゆるす。若し己おのれが罪つみと知しらば。関せきを閉とめて天兵てんぺいで防ぼぎ拒げむ
と。あつて其罪そのつみへ塗ぬる。塗ぬる如ごとく。我われ立たと。とらふ。汝なんぢが首くびを刎きつ
天下てんかふ其罪そのつみと。徇示しゆんじべし。と詳まふ告つげ。と。章平あきひらの。大おほい怒いかり高たかし
小せう。呼よびつて申まをす。我われの素雍王そおうおうの。一ひと族しやく小せう。と賤せんく。此こゝ関せき門もんの要やう
隘あい。守まもる。大おほい將しやうある。汝なんぢが如ごとく。淮陰わいゐんの賤せんき。勝かちつ。夫と降くだらんや。
一ひと刀たう小せう。汝なんぢが舌したを割きら。ず。め。と罵ののり。後のち小せう。侍しやく立た。姚龍やうりゆう斬き武ぶ急きふ
小せう。章平あきひらが髻むすと。揪ひつ。引ひ伏ひせ。速すみ小せう。面縛めんばく。と姚龍やうりゆうの令しやくと下くだ。と関せき
門もんの。肩かたを関せきの。呼よび。れば。関せき上じやうの。軍士ぐんし倚より。大おほい驚おどき。周章しゆうしやうが。と騷さわ
如ごとく。小せう。姚龍やうりゆう斬き武ぶが。伴とも来きり。一ひと百ひやく餘じゆの。兵へいが。と拔ひつ。と。妨たがふ。と。為なる。者もの。汝なんぢの片かた
端はたより。靡倒みだうせ。救すくふ。と。する。者もの。も。多おほく。け。と。姚龍やうりゆう斬き武ぶ同どう音おん小せう

関上せきじやうの軍兵ぐんぺい小せう。諭告ゆんこくて。曰いは。漢王かんわうに。徳とく小せう。長ちやうトとる。君きみ小せう。と。天てん
下かの。民たみ。尽つく。心こゝろを。反かへす。是こゝろ天てんの。命めいず。所ところ小せう。有あり。と。速すみ小せう。降くだ。と。参さんせ
よ。命めいと。扶たすけ。と。申まをす。関せき上じやうの。軍士ぐんし倚より。皆みな拜ひら伏ふ。と。降くだ。人ひとと。あり
け。と。関せき門もんを。左ひだり右みぎ。関せきひ。て。漢かんの。兵へい士しと。迎むかひ。と。散さん関せきの。内うち。小せう。満まんと。
錐こしと。立た。と。地ちも。大おほい旗はた小せう。旗はた。翻ひらと。風かぜ小せう。靡み。と。流なが。と。元げん来らい
此こゝ姚龍やうりゆうと。斬き武ぶとの。兩りゆう個この。嘗かたて。韓信かんしんが。計策けいさくと。假かり小せう。蜀しやくの。棧道けんどう
と。修復しゆふの。事ことと。掌つかり。と。詭いつはりの。道みちと。以もつて。散さん関せきへ。降くだ。と。参さんせ。と。大漢たいかん小せう
と。屈強くつきやうの。大將たいしやうと。呼よび。と。周軋しゆうえん陳武ちんぶの。兩りゆう位ゐあり。殺ころ。と。令しやく。章平あきひら智ち
あつ。と。の。と。此こゝ。兩りゆう個この。心こゝろと。合あは。せ。計けいり。と。と。あ。れ。と。何なにと。以もつて。堪か
と。且かつ。斯かま。と。小せう。章平あきひらと。欺あざむ。と。如何いかと。と。あ。れ。と。夫と。散さん関せきの。險けん
と。岨しよふ。と。力ちからと。以もつて。攻せう。と。此こゝの。已い方はうの。損傷そんしやう計けいと。と。兵へい法はうの。曰いは。と。如ごとく

韓信が計策
章平を生捕
散関を落と



上兵へ伐謀と言傳へる規矩とて。韓信の計ひける最賢ま
 とあつた。韓信の内に入りて五千餘の降人をして懐け柔く飲食を
 其後小章平と引出さるて申ける。汝の素章早耶が一族ふく
 林足小事へ。暴虐不道と顧む。妾小我意と恣ふ。天兵を拒む
 と。其罪輕き非ざる。我今汝が首を斬て。万民小示さんとあふ
 少類あれど。料る小汝の癩狗の輩。我刀を汚せ小足らば。我思子
 細のまへ。暫く命を扶助べしとて。軍政司小命を下しと。牢獄小囚へ
 置しむ。漢王の大軍を引率しと。早既小関外まで来ぬ。小斥候
 の者より告げしむ。韓信の諸大将と。左右小率ひて出迎ふ。漢王
 小散関の破しと。小関を限りなく喜びぬ。諸大将の拜礼し
 然。而韓信小宣ひける。卿が功績感小堪ら。前言の違はざる

と。賞する小暇あり。且亦周勃陳武の挙動亦感ずる小餘あり。
 後必厚賞ぬ。且散関の要害の地あれば。此地の敗る
 と。須聞ば三秦の章邯。小併の膽魂を失ふ。快とあつた。韓信
 奏して曰ける。散関既小破し。これ小竊小斥候を遣して三秦を
 伺しむ。小未怠りて備あり。陛下且く此処小諸軍を率ひて留置
 ぬ。臣速小諸大将。兩三輩を率連て。廢丘を侵し。伐て先章邯を
 擒ふ。一日も早く。三秦を平定し。及ぶ。必ぞ疑ひあつた。小
 軍糧の備はま。平生より相國の背ひ置らるゆあれば。心安ま
 とあれども。敵國の運送の往來の路の隔りて。思ふ小増し難けれ
 べ。陛下亦使て馳て。蕭何の方へ催促させ。又棧道修復の美へ
 人夫を増て。一日も早く成就を促すべし。今日までの修復は皆

敵と計るの為あり。日と費と善とすれば早散関を領畧して。関より以西の大漢の領國あれば。棧道の往來を便利にして。兵糧を運送の滞るるを免れ。為小必ず成就を急めすべし。陛下此を計能く之と。計議細く演説する。漢王之て実めると同く。諸軍と率いて散関を屯して。留りけり。夫より涼州中へ使て立兵糧の事共より。棧道修復のゆえ。韓信が演説せし。其趣を達し。是れ小於て韓信の先章平と引出させ。其耳を割て散関を追拂ふて。廢丘へ放遣て。返りし。是れは章邯の十分の怒を發せし。ゆん為あり。乃ち令と傳へて。曰。夏侯嬰を先鋒とし。辛奇を添え。第一陣の殿とし。進ませけり。第二陣の樊噲を大将とし。牙將。数人と添へ遊軍とし。第一陣の援とあり。既小散関を二軍小

あく攻落し。方勢小無くて。軍士勇しく。廢丘と指て殺奔せり。此所謂明修棧道。暗度陳倉といはる。古昔より善兵を用ひ。者。君と之のいとも十日の内小散関を己方小損傷少く。容易之と降すと。誠み以て比類ある。妙策と謂ふべし。韓信が東征の第一の功あり。孫子兵法の法に國と全する。破る之小次ぐ。又曰。百戦百勝の善の善あり。非む戦ひて人の兵を屈するの善の善あり。者あり。と己方より師を出さば。口武備を嚴め。常小軍馬の調を為し。民を撫心士を愛し。君上と親む。嬰兒の母と慕ふが如く。國小事有る。余も惜まざると。

あく。常小軍馬の調を為し。民を撫心士を愛し。君上と親む。嬰兒の母と慕ふが如く。國小事有る。余も惜まざると。

衆人の服するを厚くして鄰國より自ら従服して援せしむ
 べし。今も敵とある國も自然と降参ふ及ぶあり。まことに義の正
 以て告諭して降参するを不戦して勝りあり。之を兵法の第一
 とす。韓信が兵法の破圍法之と孫子の曰く第一等の兵法
 と謂ふ。然るに有るに韓信が兵法の拙しといふあり。全
 ちて勝るに敵破れしに敵の情を能知りて然る後其機を
 當る兵法を用る兵も熟する者との全圍と第一と
 まればこそ敵の情も叶わぬ。所謂枚子と定規とあり。如し
 豈勝るべきことを得んや

訂正 繪本漢楚軍談第二輯卷之六了
 補刻

